



創立昭和46年
(Founded 1971)

日本学術会議協力
学術研究団体

CAJ News

日本コミュニケーション学会ニュースレター
ホームページ: <http://www.caj1971.com>

日本コミュニケーション学会 事務局
〒480-1197 愛知県長久手市片平9
愛知淑徳大学メディアプロデュース学部 五島研究室内
電話0561-62-4111 & FAX0561-63-9308 e-mail: cajoffice@caj1971.com



教育を考え、見つめなおす

会長 宮原 哲 (西南学院大学)

短夜の候いかがお過ごしでしょうか。今年も年次大会の月を迎えました。

6月といえば大学野球にとっても全国大会の月です。残念ながら、私が部長を務める西南学院大学硬式野球部は、昭和34年以来50年以上全国大会出場を逃してきましたが、大学スポーツは教育の場。人間関係を実践で学び、社会規範を身につけ、多くの人たちに感謝し、単位を履修し、卒業する。人間力を身につけた学生は、卒業後も力を発揮し、社会貢献していると自負しています。80名の部員を抱える野球部の部長として、学生から多くのことを教えてもらったと感謝しています。神宮、という夢はまだ叶っていませんが。

年次大会のテーマは「教育」。これまで、歴史、文学、文化人類学、政治学などの領域との関連、共通点、相違点を探ることによってコミュニケーション学のアイデンティティーの構築、再生に努めてきました。教育を取り上げるのは意外に初めてです。

体罰、いじめ、モンスターペアレント、教師のメンタルヘルスなど、教育を巡る問題が山積しています。すべてコミュニケーションの問題とは言いませんが、「教育」は教師と生徒が問題の答を求めて共に一歩ずつ進む道程、まさに人間のシンボル活動です。教育を取り上げることには三つの意義があります。まず、昨今取りざたされている「コミュニケーション能力習得」のための、効果的教育、指導方法を考えることです。グローバル社会で求められているのが単なる話し上手ではないことは明らかですが、では、何をもって能力が高いと言えるのか、一つの方向に進んでいるとは思えません。この問題を議論できる場が今年の年次大会だと願っています。

次に、科目や内容に関わらず、人が人を教え、育てる過程がコミュニケーションである以上、教育の場すべてで教える側の能力が問われています。考えなくてはいけないのは、コミュニケーション学者や外国語教師に限らず、数学、社会、音楽、体育、すべての教科に関わる人たち、また学校以外だと、親、会社の上司、部活の先輩など、さまざまです。

最後に、アイデンティティーの確立と強化を目指す私たちにとって、年次大会は教育というコンテキストを借りて、コミュニケーション学の真価を再確認する可能性ととらえられます。家庭に始まり、学校、会社、地域で教育を通して意味を創造、再生する以上、コミュニケーションが鍵。だとすれば、コミュニケーション学の研究に何が求められているのか、他の領域と協調しながら研究を推進するにはどのような理解の共有が必要なのか、「共育」について考える場にしましょう。

6月22・23日、立教大学池袋キャンパスで開催します第43回年次大会では、基調講演改め学術講演として、学習院大学の佐藤学氏に「学びにおけるコミュニケーションの構造 一対話的实践による学びの共同体へ」と題してお話いただきます。また、(1)学術局セッション「論文を投稿しよう！海外の学術雑誌への投稿から掲載までの流れ」(2)サンノゼ州立大学、アン・マリー・トッド氏による特別講演“Patriotic Rhetoric and Global Citizenship”(3)日米交歓ディベート(4)公開シンポジウム:「キャリア教育におけるコミュニケーション教育」など、盛りだくさんの企画をして多くの方々のご参加をお待ちしています。

最後に、『ヒューマン・コミュニケーション研究』、『スピーチ・コミュニケーション教育』の二種類のジャーナルを統合し、新たに『日本コミュニケーション研究』として刊行したり、ホームページの刷新に着手するなど、CAJが多くの方から信頼され、愛される学会へと成長できるよう新しい努力をしています。皆様のご意見やご要望を取り入れ、愛着を持たれる学会へと育ちたいと願っています。

第43回年次大会 会場校からの挨拶

実行委員会では、今回の年次大会が会員の皆さまにとって実り多きものになり、コミュニケーション研究・教育の発展に少しでも貢献できるよう、鋭意準備をすすめております。会場の立教大学はJR、地下鉄、私鉄「池袋駅」を降りて徒歩7分という、非常に交通の便のよい場所にありますので、奮ってご参加いただけるようお願いいたします。また、初日の夕方より池袋駅近くの東京芸術劇場内のイタリアンレストラン（アルテアトロ）にて懇親会を開催いたします。こちらにも是非ご参加いただき、イタリア料理やワインを楽しみながら、参加者同士の交流を深める場としていただければ幸いです。

（実行委員長 師岡淳也）

学 術 局 報 告

第43回年次大会について

- ・第43回年次大会は、2013年6月22日、23日の両日、立教大学（東京都豊島区）において開催されます。師岡淳也先生（立教大学）を大会実行委員会委員長として、準備が順調に進められています。
- ・年次大会の参加申込は、昨年度同様に、オンラインによる申し込みとなります。従いまして、本年も従来の振込用紙は同封されていません。CAJのホームページから、年次大会の申込ホームページに進み、ネットの上で申し込みを完了してください。大会への登録と同時に、ご希望の方は、懇親会についてもこのホームページからお申し込みください。支払はオンラインによるカード払い、または銀行振り込みになります。
- ・申し込みの際し、会員番号を入力する欄があります。会員番号は、ニュースレターなど学会から送られる郵便物のあて名の一部に記されています。大会登録に際しては、この番号を参照ください。
- ・例年と違う点として、今大会では、お弁当の申し込みを受け付けません。開催校の周辺には、レストランやお弁当屋さん、コンビニエンスストアが多数ありますので、各自でご用意ください。また宿泊についても、今大会については各自でご手配をお願いいたします。東京での開催のため、大会申込ホームページには宿泊の申し込みがありません。宿泊についてお手伝いが必要な方は、大会運営をお手伝いいただいているトップツアー(株)様に直接ご連絡ください（連絡先は大会申込ページをご参照ください）。
- ・本年次大会では、「コミュニケーション学と教育」というテーマのもと、多くの研究発表の応募がありましたことを報告いたします。2013年2月20日の締め切り時点で、研究発表23件に加え、2つの研究会パネルの応募がありました。5人の査読者の評価をもとに、22件を採択し、理事会において承認されました。多数のご応募、誠にありがとうございました。これらの研究は類似したテーマを中心に、3会場に分かれ、2日間の日程でご発表いただきます。詳しくは大会ホームページ、または大会プログラムをご参照ください。
- ・今年度の開催テーマ「コミュニケーションと教育」のもと、6月22日午後、学術講演とシンポジウムが開かれます。学術講演では、「学びにおけるコミュニケーションの構造：対話的实践による学びの共同体へ」という題で、佐藤学先生（学習院大学）にお話しいただきます。それに引き続き、学会員を代表して松本茂先生（立教大学）と石橋嘉一先生（山形大学）が加わり、佐藤先生とパネルディスカッションを行います。
- ・今大会の特別企画のひとつとして、6月23日(日)14:30より、公開シンポジウムを開催します。「キャリア教育におけるコミュニケーション教育」という題で、本田由起先生（東京大学）と谷田川ルミ先生（芝浦工業大学）をお招きし、宮原会長と対談いただきます。とても興味深い議論が展開されることと思います。この公開シンポジウムは、昨年同様、会員以外の方も無料で参加できます。ご関心のある方をお誘いのうえ、ぜひご参加ください。

- ・特別企画としても一つ、特別公演が予定されています。来日されるアン・マリー・トッド先生（サンノゼ州立大学）に、「Patriotic Rhetoric and Global Citizenship」というタイトルでお話しいただきます。それに引き続き、やはり来日中のアメリカ人ディベートチームとの日米交歓ディベートを行います。模擬ディベートとして行っていただき、トッド先生にもコメントしていただきます。ご期待ください。
- ・学術局セッションとして、今年度も、「学術論文セミナー」を開催します。今年度は特に国際ジャーナルへの出版に焦点を当て、「論文を投稿しよう！海外学術雑誌への投稿から掲載までの流れ」と題し、奥田博子先生（関東学院大学）と花木享先生（南山大学）にお話をお伺いします。学術論文の質的な向上について皆さんと議論し、日本のコミュニケーション研究の発展に寄与していきたいと思っております。
- ・今大会の懇親会は、アルテアトロにて19：00から開催されます。アルテアトロは、東京芸術劇場2階で、開催校の立教大学から徒歩7分、池袋駅正面にあります。申し込みは大会ホームページからですが、当日申し込みも若干の余裕があります（先着で20名様程度）。おいしいイタリアンを楽しみながら交流を深めたいと思っております。ぜひ積極的にご参加ください。

（副学術局長：年次大会等担当清宮徹）

ジャーナルに関するお知らせ

現在2012年度の学会誌「ヒューマン・コミュニケーション研究」「スピーチ・コミュニケーション教育」の編集作業の大詰めを迎えています。内容としては、4本の研究論文、第42回年次大会基調講演者の佐藤卓己先生の論考他2つの特別企画をお届けする予定です。6月上旬には皆様にお届けできるよう順調に作業を進めていきたいと思っています。どうぞお楽しみに。

お伝えしてまいりましたように、二冊の学会誌は来年度から一冊に統合されます。これまでの多くの編集委員長のご尽力により、長年にわたりこれら二冊は本学会における両輪となって、日本のコミュニケーション研究・教育を牽引してきました。その歴史に今一つの区切りがつけられようとしています。来年度からは「日本コミュニケーション研究」と名称も改め、再査読システムの導入や年二号の発刊など、最新の研究をより迅速に世に送り出すことができるようになります。

その意味で、来年度は本学会にとってあらたな「船出」となります。しかし、これら一連の改革は研究活動を活性化するためのインフラ整備に過ぎず、「船」の名前を替えただけでは何も変わりません。「乗組員」はあくまで学会員の皆様一人ひとりであり、その船を動かす「原動力」は皆様の研究教育に対する熱意とその成果を社会に還元しようとする責任感です。皆様の熱のこもった論考をお待ちしています。

現在、「日本コミュニケーション研究」第1巻1号に掲載する投稿論文を受け付けています。投稿方法は、基本的にメール投稿となっており、以下のメールアドレスに添付ファイルにて送付することになっています（詳細は公式ホームページをご参照ください）。次号の締切は7月末日です。

journal@caj1971.com

私の編集委員長としての任期もあと一年となりました。何かと綻びが目立つ頼りない委員長でありましたが、皆様方からの叱咤激励をうけながら、幕引きと幕開きの重責を果たすべく、残りの期間尽力していきたいと思っています。どうぞよろしく願いいたします。

（副学術局長：ジャーナル担当吉武正樹）



2012年度・ジャーナル掲載論文

『ヒューマン・コミュニケーション研究』第41号（平成25年）

特別企画Ⅰ：

佐藤卓己「メディア史の可能性—コミュニケーション研究との間—」

研究論文：

居關友里子「会話と活動の関係から見る会話終結—日常追跡法による大学生の会話を中心に—」

松永正樹「部下から上司への建言とその要因、背景、コミュニケーション—『Voice 行動』に関するプロフィール分析と、計画的行動理論に基づくモデル構築—」

特別企画Ⅱ：「日本コミュニケーション研究」の未来—『ヒューマン・コミュニケーション研究』および『スピーチ・コミュニケーション教育』の歴史的意義

吉武正樹「企画趣旨」

James R. Bowers “The Early Legacy of Communication Association of Japan Journals: Transition from Conference Proceedings to Academic Journal”

岡部朗一「CAJの学会誌評価—私的な覚書—」

森口稔「一般社会が求めるコミュニケーションとCAJにおける研究の方向性について」

石井敏「日本のコミュニケーション研究・教育の促進に必要な新興課題」

近江誠「コミュニケーション研究者への遺言状—レトリック・スピーチ学の訓練によることば教育の場は姿を変えたコミュニケーション研究の臨床である—」

松永正樹「日本コミュニケーション研究の未来に向けて—研究テーマと『実学志向』に関する提言—」

『スピーチ・コミュニケーション教育』第26号（平成25年）

研究論文：

池田理知子「水俣病／水俣病事件を語り継ぐための模索—対話形式の語りの場の可能性—」

吉田睦「ビデオカンファレンスにおける海外日本語学習者のコミュニケーション—遠隔接触場面の課題と可能性—」

特別企画：大学教育とレトリカルスタディーズ

青沼智「企画趣旨」

藤巻光浩「これからの市民社会とレトリック教育—問題提起から—」

畑山浩昭「術語の理解と図表の利用を基本とするレトリックの授業」

田島慎朗「コミュニケーション学のレトリック研究=教育の一実践—『語り』の試み—」

中西満貴典「大学におけるコミュニケーション教育の可能性—知をひらくレトリック実践—」



事務局報告

1. 2013年度年会費の請求について

2013年度の年会費は7月中旬頃に請求させていただきます。

2. 会費滞納による除名とジャーナル受け取りの権利について

2013年6月21日に開催される理事会までに2010年度、2011年度、2012年度の会費が全て未納の場合には、会則第12条内規に従い、特別な理由がない限り除名させていただきます。また会則第8条内規に従い、2011年度の会費が未納の場合（2012年度入会者は除く）にはジャーナルをお送りすることができませんのでご了承ください。

3. 会費残高の確認について

学会ホームページの「会員各種手続き」→「会員登録情報変更手続き」のページにて、会費の残高（未納金額）をご確認いただけます。振込用紙を紛失された方は、郵便局に備え付けの用紙をご利用いただくこともできます。残高をご確認の上、下記の郵便振替口座にお振込みください。

郵便振替口座番号：00190-0-721181

加入者名：日本コミュニケーション学会

4. 学生会員・準会員登録申請について

大学院生対象の学生会員、学部生対象の準会員として登録するには、登録申請が毎年必要です。既会員の申請期限は7月末日です。申請書のフォームは同封の用紙をご利用になるか、学会ホームページの「会員各種手続き」よりダウンロードし、学生証等のコピーを添付して郵送で学会支援機構までお送りください。

5. 住所等変更届けのお願い

住所や所属が変わられた場合には、速やかに学会支援機構までご連絡いただくか、学会ホームページでのWebシステム上での変更をお願いいたします。変更の際には、会員番号とパスワードが必要になります。会員番号は学会支援機構からの郵便物の宛名の下に記載されている10桁の番号です。パスワードを忘れた場合、生年月日が登録されていれば、ご自身での確認が可能です。パスワードをお忘れになり、かつ生年月日を登録されていない場合は、生年月日の登録を直接学会支援機構までご依頼ください。なお、従来通りのメールや葉書等でのご連絡も受け付けますが、学会事務局ではなく学会支援機構までお願い致します。

6. 学会発刊物の購入申し込みと閲覧、複写申し込みについて

ジャーナルのバックナンバー、記念論文集、大会プロシーディングズ等学会発刊物をお求めになりたい場合、学会支援機構にお問い合わせくださいますようお願い申し上げます。なお、ジャーナル、記念論文集については、国立情報学研究所の論文情報ナビゲーター CiNii (<http://ci.nii.ac.jp/>) に、著者により公開可とされた論文が掲載されており、閲覧、印刷することができますので、こちらも是非ご利用ください。同サービスを利用せず、複写をご希望の場合は、学会支援機構までお問い合わせください。

広報局便り

1. 第43回年次大会の広報局活動

広報局では、プログラム広告と大会当日の書籍展示のご協力を呼びかけました。今年は、以下の企業様からのご協力を得ました。心よりお礼申し上げます。

① プログラム広告へのご協力企業様（アイウエオ順）

キャンパスサポート西南、京都書房、春風社、ナカニシヤ出版、有斐閣

② 書籍展示ご予約企業様（アイウエオ順）

京都書房、ピアソン・エデュケーション

両社とも両日のご出展の予定です。多くの参加会員の皆様に、出展ブースへのお立ち寄りをお願いいたします。

2. NL について

今号以降、NL の新しい企画として、「コラム：コミュニケーション教育」、「書評」、および「コミュニケーション研究者／実践者によるエッセイ（仮題）」の連載を計画しております。今号では「コミュニケーション教育」（松本茂先生）と「書評」（青沼智先生）の第一回連載を掲載いたしました。次号以降、3つの企画への会員の皆様からの投稿もお待ちしておりますので、奮ってご寄稿下さい。

3. ホームページについて

①年次大会発表論文募集の広報活動の強化

- ・トップページに特設の募集要項を掲載
- ・HP のページ本体に募集要項を掲載
(従来の PDF を開いて募集要項を表示する方法から変更)
- ・年次大会案内のページを学術局と連携し、デザインを一新
(募集要項と発表申込のプロセスを分かりやすく提示できるように工夫)

②ニュースレター公開による戦略的な学会広報の実施

- ・ニュースレター最新号（102号）を掲載し、学会活動を非会員の方々へも公開

③今後の予定

- ・学術局と連携し、HP での年次大会広報の強化を実施
- ・年次大会一般参加者数増強を目指した戦略的 HP の運営


4. ホームページなどに関して、ご意見やご提言があれば、広報局まで、お気軽にご連絡をお願いいたします。

また、多くの情報を CAJ ホームページ (<http://www.caj1971.com>) に掲載していますので、時々、ぜひご覧ください。

(広報局長 山口生史)

高等学校におけるディベート教育最新事情

松本 茂 (立教大学)



本年4月、高等学校において新しい学習指導要領が実施された。今回の改訂で重視された一つの点は、「思考力・判断力・表現力」の育成。全教科の学習指導要領および解説では、思考力・判断力・表現力を育む活動として、「討論」「議論」「批評」「話し合い」などが奨励されている。例えば、「保健体育」では「筋道を立てて練習や作戦について話し合う活動などを通して、コミュニケーション能力や論理的な思考力の育成を促し、主体的な学習を充実するよう配慮する」と、「数学」では「自らの考えを数学的に表現し根拠を明らかにして説明したり、議論したりすること」といった指導上の配慮を求めている。

また、東京都教育委員会は新学習指導要領の実施を先取りし、2011年に「言語能力向上推進事業」を立ち上げ、65の推進校を指定。以来、通常の授業にディベート活動を根付かせようとしている。これにあわせ、2012年は英語科と国語科の教員向けにディベート指導に関する研修を、今年は全教科の教員向けに研修を開催した。また、昨年、他校生徒との交流の場として「都立高校生のための言葉の祭典」をスタートさせた。内容は、討論(ディベート、日本語および英語部門)、弁論(スピーチ、日本語および英語部門)、書評合戦(ビブリオバトル、日本語部門のみ)。なお、本年の書評合戦は独立した大会として開催予定である。

茨城県教育委員会も2011年に「ディベート・チャレンジ事業」を立ち上げ、土浦一高や水戸一高といったいわゆる進学重視校を含む21校を指定し、それ以来、英語の授業へのディベート活動の導入を推進している。同委員会は、同じく2011年、第1回茨城県ローズ杯高校生英語ディベート大会を開催。その後も毎年開催し、競技ディベートの場を設けている。

競技ディベートと言えば、日本語ディベートに関しては、全国中学・高校ディベート選手権(通称・ディベート甲子園)抜きでは語れない。本年8月に開催される大会が18回目となる(会場は東洋大学)。主催している全国教室ディベート連盟(理事長:藤川大祐・千葉大学教授)は全国に支部を持ち、競技ディベートのみならず授業でのディベート活動の普及に努めてきている。

英語の競技ディベートについては、全国高校英語ディベート連盟(理事長:加納幹雄・岐阜聖徳学園大学教授)が本年12月に第8回全国高校生英語ディベート大会を長野県の松本大学で開催する。昨年度の大会から文部科学大臣賞(賞状)が優勝チームと最優秀ディベーターに授与されることになった。また、この大会は世界大会の予選として位置づけられており、昨年度の優勝チーム(栃木県立宇都宮高等学校)はWorld Schools Debating Championshipsに、準優勝チーム(北嶺高等学校〔私立・北海道〕)はInternational Debate Education Association Youth Forumにおけるディベート大会に日本代表として出場した。

これまで30年近く、日本におけるディベート活動の推進・普及に努めてきた日本ディベート協会(会長:師岡淳也・立教大学准教授)は、設立当初から米国コミュニケーション学会(NCA) Committee on International Discussion and Debateと日米交歓ディベート・ツアーを共催しており、ディベートの代表チームを交互に派遣して交流に努めている。本年6月には、サンノゼ州立大学コミュニケーション学科のAnne Marie Todd教授が学生2名とともに来日し、約3週間にわたり全国の大学生・社会人のみならず高校生とも、ディベートを通して国際交流を図ることになっている。

日本コミュニケーション学会の会員諸氏におかれても、高等学校におけるディベート活動を支援いただければ幸いである。



Rhetorical Criticism: A Study in Method.

Edwin Black 著

New York: Macmillan, 1965
rpt(with the Author's Forward), Madison: University of Wisconsin Press, 1978.
ISBN: 978-0299075545

スピーチ／コミュニケーションを「話者」また「話者の目の前の聴衆」の視点のみで語ることはもはや不可能・不適切だと主張の下、当時支配的であったいわゆる「新アリストテレス派」の限界を鋭く指摘し、レトリック批評 (rhetorical criticism) における多元的な方法論の必要性を論じた本書は、初版以来約半世紀が経とうとしている今日も未だに版を重ね、時代を経て読み継がれている。Black の博士論文 (コーネル大学大学院スピーチ・ドラマ学科、1962年) を土台とした本書は、スピーチ／コミュニケーション研究の「プロパー＝生え抜き」によって著された、数少ない「現代的古典」の一つといってもよい。

『CAJ News』の新企画である書評にあたり、手始めに本書を取り上げたのは、初版発刊当時の学界動向を今に伝える歴史的資料としての位置付けからではない。と言うのも、私たちにとっての本書の意義は、より根源的・普遍的なところ、具体的には Black が説く人文学としてのスピーチ／コミュニケーション研究、そしてレトリック批評や批判的研究 (critical study) に従事する者のあるべき姿、つまり「批評家 (critic)」としての態度にあると考えるからだ。

Black の描く「批評家」は、科学者のごとく所与の事象を客観的に記述し、その因果関係を検証・立証することが仕事ではない。第一に事象の「解釈者 (interpreter)」であり、それと同時に、自身の解釈を通じ、その事象についての人々の理解に影響を与えることを生業とする人文研究者である (6頁)。そして、critic/criticism/critical の語源である krisis ということばが示すように、「批評家」の解釈の先には何かしらの「判断 (judgment)」があり (102-103頁)、しかもその判断は教義的な杓子定規によるものであってはならない (131頁) と彼は主張する。さらに、批評の方法は、「批評家」自身の立ち位置と不可分つまり「個人的 (personal)」な存在であり、それ故、「批評家」の解釈・判断には「公的な責任 (public responsibilities)」が問われる (xii 頁) と彼は説く。

Black が描いた「批評家」像は、当時彼が想定した (米国の) 読者以上に、いま・ここで研究活動に従事する私たちに対して示唆するところが大きいと思われる。例えば、レトリック「批評家」は、スピーチ／コミュニケーションの「説得力」を測る立場には無いし、そのような研究を批評の名の下で流布するレトリック研究者は、「こう言えば人は動く!」といった非科学的な自己啓発本の著者と何ら変わらない。本来、そういった効果に関する客観的な問いについては、スピーチ／コミュニケーションの分野で、科学者としてのトレーニングを受けた仲間に任せるのが学術を生業とする者のあるべき姿だろう。また、近年、批判的研究として多く発表されるようになった学術の、どれくらいにおいて critical の語源たる krisis が意識されているのだろうか。Critical ということばを冠する限り、データの定性的な解釈そしてその先にある判断は「私的 (private)」なものでは有り得ない (xii 頁)。批判的研究に従事する研究者に、「批評家」として問われる公的な責任を果たす準備はあるのだろうか。

Black は本書で、1912年、たった3人の聴衆の前でなされたチャップマン (John Jay Chapman) の「コーツヴィル演説 (Coatesville Speech)」を、今もなお「生きているスピーチ (the speech [that] still lives)」(88頁) として高く評価している。本書はチャップマンの演説同様、時空間を超越し、折に触れて私たちが読み返すべき生きたテキストと言えるのではなかろうか。

評者：青沼 智 (津田塾大学)

支 部 ニ ュ ー ス

●北海道支部

支部長 町田佳世子

2013年3月16日に藤女子大学で2012年度支部研究会を行いました。研究発表は、塚越博史先生（北海道医療大学）「誰でもできる web-learning 教材の作成—Youtube を活用した作成デモンストレーション」と竹内康二先生（札幌国際大学短期大学部）「『顕在的な知識』は『潜在的な知識』を生みださないか—異なった2つの知識が第2言語学習理論に示唆すること」の2件でした。北海道支部の研究会は過去2年間平日の夜に開催していましたが、今年は土曜日の午後としました。一人でも多くの会員が参加できるように、開催の時期・曜日・時間帯を検討したいと思っています。参加者は10名（会員10名、非会員0名）でした。

研究会終了後、小さめの教室に移動し、お茶とお菓子で茶話会を行いました。9名が参加し、研究発表の内容についてさらに質問や意見を交わしました。またさまざまな困難を抱える学生さんの対応について、先生方のご経験をまじえながら情報交換も行いました。研究発表の場では時間の関係で不十分になりがちな質問、意見交換も、時間を気にすることなくくつろいだ雰囲気の中で十分に行うことができ、実り多い時間となりました。

2013年度の支部総会と研究大会は10月～11月に開催予定です。たくさんの研究発表そしてご参加をお待ちしております。



2012年度北海道支部研究会（3月16日）

●東北支部

支部長 小林 葉子

支部 HP <http://www.caj1971.Com/~tohoku/>

支部ブログ <http://tohokucaj.jugem.jp/>

2013年3月2日(土)午後13時より、定例研究会を開催しました。

場所：「仙台青葉カルチャーセンター」404会議室 参加費無料。

13:00 開会式 支部長挨拶 小林 葉子（岩手大学）

13:05-

- (1) 【実践報告】田島 弘司（上越教育大学）：「震災復興を担う中核的人材育成『いわて高等教育コンソーシアム』特別講義『絆・仲間作り』を担当して」
- (2) 【実践報告】石橋 嘉一（山形大学）：「産業界のニーズに対応したコミュニケーション教育の改善と充

実体制整備」

- (3) 【学会報告】 會澤 まりえ（尚絅学院大学）：「第4回ヨーロッパコミュニケーション国際会議（ECREA 2012）に参加して」

14：35－

- (1) 【研究発表】 會澤 まりえ（尚絅学院大学）：「クールジャパン現象の中のコスプレ」
(2) 【研究発表】 五十嵐紀子（新潟医療福祉大学）・関久美子（新潟青陵大学短期大学部）：「介護施設職員と実習生のコミュニケーション観」



「定例研究会にて藏元先生を囲んで」

- (3) 【学会報告／研究発表】 川内 規会（青森県立保健大学）：「医療分野のコミュニケーション傾向とその特殊性—社会が求める医療従事者の態度と期待」（第21回 CAJ 北海道支部研究大会のシンポジウム「分野別コミュニケーションを考える」にパネリストとして参加）

16：00－休憩、支部会議、

16：45－閉会式 副支部長挨拶・藏元 礼子（青森公立大学）

CAJを退会なさる藏元先生に、支部より感謝の品を贈呈致しました。写真中央は、いつも本当に素敵な笑顔で、議論を盛り立てて下さった藏元先生です。

今後の予定：

- ・2013年6月年次大会前に「東北支部20周年記念誌」発行予定。
- ・2013年秋、東北支部ニューズレター（vol. 21）を発行予定。順次、支部HPに掲載。
- ・2013年11月31日13時より、山形駅前の山形大学サテライト教室にて、研究大会開催予定。支部ブログに最新情報を掲載中です。

●中部支部

支部長 福本 明子

2013年1月以降の中部支部の活動を報告致します。

(1) 中部支部ニューズレター：

第3号を3月に発行しました。2012年度の支部の活動報告（年次大会パネル発表、支部大会）、会計報告、書評プロジェクト（7本）、会員紹介が掲載されています。中部支部ホームページ（<http://www.caj1971.com/~chubu/>）にも4月以降に掲載する予定です。是非ご覧ください。

(2) 今後の予定：

12月以降の行事については、詳細が決まり次第、支部のメーリングリストで連絡を差し上げます。ご参加、お待ちしております。

6月 支部会（年次大会、初日の昼食前）

12月あたり 支部大会

1月末 書評締切

3月 ニュースレター発行

●関西支部

支部長 森口 稔

3月20日(水)に、大阪市内の城北市民学習センターにて、「時代の文脈で考える、体罰」をテーマに、第11回関西支部大会を開催し、大会には20名、懇親会には11名の参加がありました。支部総会の後、日本経済新聞社大阪本社で社会部の遊軍（多種多様なテーマの取材や企画をするグループ）キャップを務めておられる前村聡氏をお迎えしてご講演頂きました。

現在、桜ノ宮高校バスケットボール部員の自殺や女子柔道全日本チームの内部告発をきっかけに、毎日のようにマスコミでスポーツ指導や体制のあり方に疑問が投げかけられていますが、ご講演では、これらの事実と報道の在り方を「時代の文脈」から整理・分析して頂きました。この後、指定コメンテーターからのコメントを元に、活発な議論が行われました。続いて、3つの研究発表がありました。1) カナダへ留学した高校生を対象として、言語と文化の適応状況について調査・検討したものの、2) 難民審査の参与員、難民裁判の弁護士、難民支援協会のスタッフなどへのインタビューをもとに、日本の難民審査の通訳に関わる現状と問題点を考察したもの、3) 非協調的コミュニケーションの中でも evasion（遁辞、言い逃れ、ごまかし）に注目し、これを相手に悟られないように行う covert evasion を分析したもの。発表後は、質疑応答を通して、コミュニケーションに関する様々な問題意識が深められました。最後は、大会の余韻が残る中、前回テーマ「時のながれ」から今回の「時代の文脈」への足跡を感じる、有意義で楽しい懇親会となりました。



「前村聡氏講演」



「第11回支部大会参加者」

プログラム

- ・支部総会
- ・講演「時代の文脈から考える、体罰」前村聡（日本経済新聞）
- ・コメントおよびディスカッション
指定コメンテーター：森川知史（京都文教短期大学）、北本晃治（帝塚山大学）
- ・研究発表
“Cross-Cultural Experiences of Japanese High School Students in Canada” Hisashi Tominaga, Adam Acar (Kobe City Univ. of Foreign Studies)
「日本における難民審査の通訳の現状と問題点」水野真木子（金城学院大学）
「非協調的コミュニケーションとしての「言い逃れ」～記述的／実証的アプローチによる Covert Evasion の分析～」小山哲春（京都ノートルダム女子大学）

●中国・四国支部

支部長 高永 茂

今年の第16回 CAJ 中国四国支部大会は、12月7日(土)・8日(日)に広島市で開催します。会場は広島大学霞キャンパスです。支部大会の研究発表の募集を9月から始めようと考えていますので、ふるってご応募ください。なお、特別講演を愛媛大学の秦敬治先生にお願いしました。講演のテーマは「効果的な気づきを与えるコミュニケーション～大学現場での実践～」です。秦先生は教育経営学の視点から、大学を運営する際に重要な教職員の人材開発（SD、FD）、大学職員の専門性の確立、効果的なリーダーシップ教育プログラムや手法について研究なさっています。今年度も多くの皆様にご参加いただければ幸いです。

●九州支部

支部長 伊佐 雅子

九州支部では、第20回記念支部大会を9月28日(土)、長崎純心大学で開催します。実行委員長はかつてCAJ本部と支部の運営に積極的に携わってこられた畠山均先生です。第一回九州支部大会が1994年10月2日に長崎純心大学で開催され、今年、20年という記念すべき大会を同大学で開催できるのを大変うれしく思います。

大会テーマは「異文化交流とコミュニケーション」で、基調講演と研究発表に加え、特別企画も考えています。基調講演は長崎純心大学比較文化学科の片岡留美子教授で、テーマは、「16世紀、長崎に在したセミナリオ・コレジオにおける言葉や心の教育」です。大変楽しみにしています。

論文発表の申し込みは7月20日で、支部の運営委員会を8月3日(土)に西鉄グランドホテルの「グランカフェ」で開く予定です。まずは美味しいランチを堪能し、その後、支部大会のプログラム案を検討します。支部大会のご案内はホームページに掲載いたしますので、支部会員の方々、そして他の支部の方々もぜひ参加していただけることを期待しております。

今年も支部の「ニュースレター」を6月と12月に発行します。現在、編集責任者の清水孝子先生を中心に、

第23号の企画案を練り、準備中です。

支部では今年も会員の異動がありました。この3月、西南女学院大学の橋本満弘先生が定年退職され、また、鹿屋体育大学の宮下和子先生も退職されました。橋本先生はCAJの会長を務められたこともあり、コミュニケーション研究に多大な功績を残されました。先生の柔和なお人柄と真摯な研究は多くの人々に影響を与えてきました。先生のご退職は、九州支部にとっては大きな打撃ではありますが、先生が種をまいてくださったコミュニケーション研究を発展させていきたいと考えております。一方宮下先生は、音楽とコミュニケーションに関する研究をライフワークとされ、今後も「異文化の架け橋」活動を続けられます。

平野順也先生は昨年の9月、熊本大学に赴任されました。また、熊本学園大学に勤務されていた筒井久美子先生はこの4月より立命館アジア太平洋大学（研究開発・学修支援センター）に移られました。皆様の新しい人生の門出にお祝いを申し上げますとともに、今後のご活躍を期待しております。

この一年が、実りある年となり、新たな支部の歴史を刻むことができるように支部役員一同、協力してがんばりたいと思っています。



学会支援機構の連絡先

〒112-0012 東京都文京区大塚5-3-13 小石川アーバン4F

一般社団法人 学会支援機構 日本コミュニケーション学会担当

Tel: 03-5981-6011 Fax: 03-5981-6012 E-mail: office@asas.or.jp

編集後記

ニュースレター103号をお届けいたします。今号より、新しい企画として『コラム：コミュニケーション教育』および『書評』の連載を開始、それぞれの第一回に松本茂先生（立教大学）と青沼智先生（津田塾大学）よりご寄稿を頂きました。ご多忙中にもかかわらず新企画の立ち上げにご尽力頂きましたこと、両先生に深く感謝いたします。今後さらに企画を加えつつ、CAJニュースレターが、会員の皆様にとってさらに身近で価値のあるものとなるよう努力して参ります。また、今後これらの企画への会員の皆様からのご寄稿もお待ちしております。年次大会まで後一ヶ月足らずとなりました。東京にて、多くの皆様とお会い出来ることを楽しみにしております。

広報局ニュースレター担当 小山 哲春